

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



魔法少女エンジェリック
カリン2

小説 栗栖ティナ

挿絵 緑木邑

序章	宵闇の魔法少女	007
第一章	光への回帰	023
第二章	奪われし闇～魔法少女VS魔法少女～	054
第三章	女神降臨～第三の魔法少女～	099
第四章	邪王受胎	139
第五章	謝肉祭	187
終章	光の魔法少女達	249

登場人物紹介

Characters



みやび かりん

雅華鈴

聖パリス学園に通う少女。異世界に伝わる伝説の宝具の使い手に選ばれ、魔法少女となる。普段は幼い容姿だが、変身すると豊満な身体に成長する。

おうみなぎさ

近江渚

華鈴が魔法少女であることを唯一知るパートナー。学園の誰もが憧れる凛々しい生徒会長だが、溺愛する華鈴に対してはまったく異なる顔を見せる。

クレア＝エヴァンス

聖パリス学園へ編入してきた留学生で、華鈴達のクラスメイト。いつも本ばかり読んでいて他者と交流を持たない物静かな少女。

ギスカール

異世界の魔法王国ミスルを滅ぼし、宝具を追って華鈴達の世界に現れた魔王。一年前、華鈴によって倒される。

「い、いやだ!! こんな……こんなのおっ……ンンッ……はあつ、胸……口いっ……んぐおっ……はあつ、ひゃふあああんっ!」

必死の抵抗を嘲笑うように、口内を埋める粘液棒が前後に素早く動き、根元から吹き飛ばされそうなくらい強く、ニップルを弾かれる。

甘美な刺激が背筋を麻痺させ、全身から力が抜けた直後。

ヌチュッ……ニチュルウッ……。

「ひゃうっ、ひ、広がつてるう……ンンッ……くふああっ!」

淫唇にずらりと吸いついた粘液触手達が、綻んでいた割れ目を左右へ大きく開く。薄桃色の肉が裂けそうなくらい引っ張られ、膣穴の入口を冷たい外気が撫でる。

子宮口まで覗かれてしまうのではないかとという羞恥が脳裏を過ぎった——刹那。

ズブウウウブブブンッ……ジュブリユウッ……ズチュリユリユリユウッ!!

「あああああああーっ!? ハア……あぐうっ、おおっ……んんんああっ!!」

広げられた膣口が、更に乱暴に押し広げられる。すっぽりと空いた白濁の穴をくぐり、巨根が真っ直ぐ膣道へ突き刺さった衝撃。呼吸も妨げられて遠のく意識が、膣口がミチミチと音を立てて裂けていく激痛で、辛うじて引き止められていた。

「ンギイッ……壊れるうっ……やあつ、ああっ……んんうっ、おおっ……ああっ!」

膣道が裂け、尻穴と繋がってしまうのではないかとという不安が過ぎる程の大きさ。一年前、初めて陵辱された時の屈辱と苦痛が胸の奥に蘇る。

激しく脈打つ血管の振動。陸に打ち上げられた魚の如く、ピチピチと跳ね動く竿。岩のようにゴツゴツと張り出した亀頭の部分。雌穴にねじ込まれていくその感触は、確かにかつて自分のアナルの処女を奪った憎いモノ——ギスカールの肉竿とまったく同じだった。

「犯されて……ギスカールに……あんな奴にまたあ……くそっ、くそお……」

抑えきれない悔しさが咽喉の奥から込み上げてくる。自らが葬り去った憎々しい怨敵。まさかこんな形で再開し、再び陵辱を受ける羽目になるとは夢にも思わなかった。

「勿体ない。折角、お父様の立派なモノで犯されているのだから、素直に喜べばいい」

「ふ、ふざけないでっ！ こんな……こんなことで喜びいつ……ヒヤァッ、ンンッ!?」

ブチユウッ……ヌチユリユンッ……ギチユギチユリユウッ……。

言い返そうとした声を塗り潰す、大きな水音。ゴツゴツとした竿肌が、肉壁に染み出していた蜜液を残さず擦り取っていく音。ぎつちりと充填された膣口から熱液が滴り落ちていくのが、自分でもはつきりとわかる。

「マン汁……えへへ……」「可愛い魔法少女のマン汁……たまんねえ……」

膣口を覆うように取り囲む白濁が蠢き、滴る華鈴の蜜を受け止める。響き聞こえる男子生徒達の歓喜の声に、華鈴は顔から火を噴きそうな羞恥に背を震わせた。

「やあっ、吸わなあ……ンンッ……大きいのが……奥まで……ンがあっ……ひぎうっ！」

強烈な摩擦で感覚も麻痺し、ただ燃えるような熱感だけが残っていた膣道。そこに、突然、今までとはまるで違う強烈な激痛が走った。

肉壁が裂けそうな痛みとは違う……まるで鋭利な刃物を肌に突き立てられたような鮮烈な痛み。悲鳴を堪えようとして、口を埋める粘液棒を思わず強く噛み締めてしまう。グミのような歯ごたえと強烈な腐臭が口内に広がるのを感じながら、華鈴はその痛みもまた、酷く懐かしい感触であることに気づいていた。

(これって、は……初めての時の……痛さ……そんなぁ……)

一年前。ギスカールにそそのかされた渚の雌肉棒で奪われた純潔。この刺されるような痛みは、まさにその時に感じていたものと同じもの。だがこの一年、渚との秘め事で三日と置かずに肉棒を迎えていた膣穴だ。いくら尋常ではない巨根で貫かれようとしているとはいえ、今更破瓜の痛みを感じるはずがない。

「……想定外。闇の魔力を失ったことで、身体そのものも浄化されたみたい」

華鈴の戸惑いを見抜いたように、寄り添うクレアがポツリと吹き漏らした。

「じよ、浄化……どうということなの!？」

「言葉通り。清らかな身体に戻った……それだけのこと」

「清らかつて……そ、それって……もしかして、処女に戻ったって……そんな……」

告げられた予想外の事実。だが、それ以外に膣穴を走る激痛は説明できない。

不本意な形で奪われた純潔を取り戻せたことは、決して嫌なことではない。だが、折角取り戻したそれを、よりによって最も憎む男の怒張で奪われようとしている。それを考えると、胸が引き裂かれそうな嫌悪感が湧き上がってきた。

グチュリユウウツ、グチュウ、ヌブウウツ!!

「アギイイイッ……う、動くなあつ! やだ……くっ……お前なんかにいっ……ギスカールなんかに処女……う、奪われたくなあつ、イイッ……んぐあつ……」

そんな華鈴の思いを嘲笑うように、膣穴を埋める怒張は活発に蠢き、その身を蛇の如くねらせて進撃を再開する。狭まった処女膜を突き破ろうと押し当たる硬い龟头。抵抗して下腹部に力を込めようと試みるが、蠢く竿肌が敏感な肉壁を擦る甘美感に、腰が完全に抜けてしまってもうにもならない。

(大丈夫……大丈夫だよ。エンジェルスキンがボクを守ってくれるから……)

どれだけ魔力を失っても、最後の最後まで主を守り通そうと力を発揮する宝具。かつてギスカールも散々手を焼いたその守護がある限り、純潔をむぎむぎ奪われはしない。

ビリイッ……ギユボボボオオオッ……又ジュールウウウツッ!

「アッ……があああああつ、ヒギイイイッ、イッ……んふあああああつ!!」

そんな確信を嘲笑う、鮮烈な激痛。子宮に杭を打ち込まれたような衝撃が走り、口から内臓がすべて押し出されてしまいそうな圧迫感に息が詰まる。ジンジンと鼓動の音に合わせて伝わってくる痛みが、あつさりと純潔の証が突き破られたことを知らせてくれた。

「なあつ、なんでえ……なんでええっ!? どうして——守ってくれなああつ……アアッ!」

絶対の信頼を置く宝具に裏切られた衝撃。子宮口にまでめり込んだ雄怒張は、魔法少女に呆然とする余裕も与えず、歓喜をあらわに前後荒々しく動き続ける。

張り出したカリ首が肉壁を削ぎ取り、膣道がそのまま裏返されて雌穴から引っかき出されてしまいそうな摩擦感。破瓜の激痛までが、摩擦の熱で焼き消されてしまう。

「ヒギッ！ つ、突いちややあつ……はあつ、ングッ……おおッ!!」

「お父様、嬉しそう。以前奪えなかったあなたの処女を、やつと奪えたって」

ロッドの柄を軽く上下に揺さぶり、肉棒の進撃を助けているクレアが、わずかに口元を綻ばせて呟き漏らした。

「そ、そんな……はあつ、どうして……どうして守ってくれなかったあ……」

「エンジェルスキンの守護能力は、それを身に纏う者が心から願うから発揮される。あなたが……本心では、こんな陵辱を求めている。……そうなんでしょう？」

淡々と言い放つ漆黒の魔法少女。息も絶え絶えにその無表情な顔を見上げながら、言葉を発する余裕も失った光の魔法少女は、ただ首を横に振り続けるしかなかった。

（嘘だ……ボクは快楽を求めてなんて……こんなあつさりと……んんっ、ああつ……）

そんなはずがない。心の中で繰り返し呟く言葉が、下腹部から込み上げる甘疼で塗り潰されていく。皺がすべて伸びきった膣壁を、素早く往復する怒張。グルグルとドリルの如く回転し、膨れ上がった巨大な栗の如く龟头が子宮口を繰り返し抉る。

「そこっ……子宮は駄目っ、そこは駄目だよおっ！ あぐうっ、はあつ、あんんっ！」

小さく窄まった、女として一番大切な場所への入口。その部分を剛直で突かれるのは、この一年、幾度となく渚と交わったことで開発された魔法少女の弱点の一つ。

貫かれる肉口が小さく蠢き、灼熱の肉塊をキュッと美味しそうに啜え込んでしまっているのは、日頃の習慣だろうか。憎く醜悪な魔根で突き犯されているのだと頭の中で叫んでみても、肉体が快楽を素直に喜ぶ反応が抑え込めない。

「ぶつといので犯されて、嬉しそうだな」「マ○コ涙がダラダラ溢れてるぜ」

左右に引つ張られた淫唇に群がる触手粘液も、そんな魔法少女の快感を煽るように蠢き、往復する魔男根に掻き出された蜜液を啜り始める。胸を掴む手の平状の粘液も再び大きく動き出す。ほんのわずかにずれた胸の布地。端にぶつかると乳首粒への刺激も強まり、下腹部から駆け上ってくる甘美感と合わさり、閃光の如く快楽が脳裏で弾ける。

熱い亀頭に突かれる子宮口が、キュキュと歓喜を表すように再び締まった。ヤスリの如くざらついた肌面の感触が粘膜に伝わり、擦れた甘声が飛び出す。

「あがあつ、う、動くの駄目えつ……そんなグルグル……おつ、んつ、はふあん!!」

「遠慮はいらない。お父様の素敵なチンポ……たっぷり味わって」

限界以上に押し広げられた膣内。憎き深淵王のそれを模した男根が、クレアの手によって縦横無尽に動かされる。素早く回転しながら往復し、くねる竿肌が肉壁を叩く。襲いかかる凶暴なまでの悦楽に、華鈴はただ背筋を仰げ反らせることしかできなかった。

「……お父様の大きなモノを、こんなに簡単に飲み込んで……淫乱な魔法少女」

「ち、違うもおんっ……ボクは淫乱なんかあつ……ひやああんっ、んぐっ、はあつ、ちゅばあつ……んうっ、ちゅううっ、はあつ、イツ……きやふああああつ！」

言い返そうとしても、込み上げる嬌声で言葉にならない。頭の中が押し寄せる快樂熱で茹だるよう。無意識のうちに唇が動き、口内を埋める粘液棒をしやぶり始めていた。広がる雄の濃い臭いが、身体の芯で燃え上がる雌の欲情を更に強く煽る。

「ングッ……イッ……やあつ、クウウッ……やだあつ、ああつ、きやううつ！」

布地の端に擦れる乳首がコリッと一回り膨らみを増す。執拗に蠢く触手粘液に弾かれるクリトリスが、まるでモーターを仕掛けられたように小刻みに蠢く。真つ赤に火照つた魔法少女の顔。押し寄せる絶頂の予感に恐怖しても、それを振り払うこともできない。

「……そろそろ遊びはおしまい。……終わらせて、お父様」

淡々と同じ口調で呟く漆黒の魔法少女。今までと変わらぬ声のはずなのに、今はそれが酷く冷たいものに聞こえた——その直後。

ズボボオオオオオッ！ ジュブウッ！ ヌプウウウッ！！ ブリユリユリユリユッ！

「あがつ……んふあ——ッ！！ イッ……くうつ、やあああああああつ！！」

深々と突き刺さる剛直。意識が吹き飛ばされたような激しい進りが、子宮口から直接胎内へ流れ込んでくる熱感。口内のグミ状の白濁ゼリーを嘔み締めても、込み上げる嬌声を止められない。クレアの魔法で吹き飛ばされた時以上に、肢体が宙を高く舞う浮遊感。

耐えきれない快感。きつく膣道を締めて暴れ狂う暴君を押さえ込もうとするが、蠢く竿肌が肉壁を強く跳ね返し、逆に痺れる甘美が強くなるだけ。

「やあつ——ああああああんっ！ くうつ、はあつ、し、子宮破けりゅっ……！！」



(クレアちゃん……まだ、何か企んでる？　でも……今はそれより、みんなを……)

鼓膜を刺すような、学園の人々の呻き声。自らの短絡的な過ちで巻き込んでしまった彼らを、一刻も早く苦痛から解放することが何より優先しなければいけないこと。

たとえ——どんな苦痛や羞恥を味わうとしても。

「あの……み、みんな！　苦しいなら……その……ボ、ボクと……ボクとエッチすれば、
楽に……楽になる……よ……だから……ねえ……」

頬を林檎色に染め、勇気を振り絞って吐き出した精一杯の言葉。だが、床に転がって身悶える魔物化した生徒達は、そんな誘いにまるで耳を貸してくれなかった。

「あぐうっ……あああつ！」「くそっ……女……獲物……いるのにいつ……」

欲情の澱んだ光を浮かべた瞳をこちらに向けてくる者も居たが、起き上がり、その剥き出しになった腠穴へ怒張をねじ込もうという気力までは湧かない様子。

誘いの言葉をあつさりと流された華鈴は、頬を赤らめたまま、途方に暮れて絶句する。

「足りない。もっといやらしく……はしたなく。苦痛を塗り潰すくらい、欲望を煽って」

「もっと……？　そんな……ううっ……」

今の台詞でも、目の前がクラクラするほどの羞恥に襲われたというのに、これ以上卑猥な台詞など、想像しただけで頭がおかしくなりそうだ。

だが、そうしなければ……大切な学園の仲間達が死んでしまう。

「お、お願い……します。見て……ボクの……ボクのいやらしく広がった、おま○こ……」

ほら、こんな恥ずかしい格好で……み、見えちゃってる……」

床に座り込んだまま股を広げ、自ら陰部を曝け出す。震える声を振り絞り、封印していたおぞましい陵辱の記憶を思い出しながら、できる限り卑猥でいやらしい言葉を並べ立てていく。頬の赤色が更に濃さを増し、高鳴る鼓動が、ワンピースドレスに包まれた乳房脂肪をタップと小さく揺らした。元はといえば、淫欲に塗れた日々から抜け出したいと強く願ったことがことの始まり。それなのに、こんな風に今まで以上に淫らな女を演じなければいけないようになってしまった現状が、苦しくて仕方がない。

「へへ……い、いやらしい……お前……何か、見たことあるような……か、華鈴……か」
すぐ傍に転がっていたオークが、声を震わせながら尋ねてくる。その声は、同じクラスの男子で、よくお喋りする仲のよい生徒のものだと気づいた。

「そ、そうだよ。華鈴……だよ。身体、大きくなっちゃってるけど……」

「か、華鈴……」「マジかよ……あのちっこいのが……あんないやらしい身体に……」

声を震わせながら頷くと、悶え苦しむ魔物達が小さくどよめく。自分達の見知った幼さの色濃く残る少女が、こんなに成熟した肢体となって自分達を誘っている。そのことに、少しずつ興奮が高まってきているのが、荒くなる息遣いで伝わってきた。

（正体ばれちゃったけど……それでみんなが興奮してくれるなら、我慢しないと……）

込み上げる羞恥を噛み締めながら、華鈴は意を決して言葉を続ける。

「ボク……ボク、みんなに犯して欲しくて、もう身体熱いんだ。みんなが欲しくって、身

体までエッチに成長しちゃってるんだよ……お願い……オチンチンちようだいよお！」

そこまで口にしたところで、込み上げる羞恥が限界に達した。火を噴きそうなくらい顔が熱くなり、これ以上喋れなくなる。震える唇と同じように、いつの間にか薄桃色に充血し始めていた小陰唇までがヒクヒクと痙攣を始めていた。膣口まで蠢き、奇しくもそこを埋める剛直を待ち望んでいるかのようになまってしまっていた。

「華鈴、あのちっこののがこんなにいやらしく」「華鈴とやれるのか……おおっ！」

羞恥に身悶える顔見知りの女の子。それが欲情を煽る燃料となったのだろう。苦しんでいた魔物達がヨロヨロと起き上がり、縛りつけられた華鈴の方へと歩み寄ってきた。

ゾンビのように肌が腐った生徒の、ブヨブヨと今にも崩れ落ちそうな肉棒。無数のミミズが群れ集まって蠢く、醜悪な形の男根。それぞれ見るだけで吐き気が込み上げてくる怒張が、次々と近づいてくる。それらすべてを膣穴で受け止めなければいけない。改めてその現実が胸に込み上げてきて、恐怖と嫌悪が胸を突く。

「やあっ、やめて……駄目……こんな……やっぱり……ああっ……」

「どけどけど!! こういうのは年長者優先だ、馬鹿者がっ!!」

か細い嘆願の声が、思わず口を突いて飛び出した刹那。激しい怒声が教室に響き、華鈴へ近づいていた男達が極太の腕で軽々と吹き飛ばされた。

「軟弱なチンポじゃ面白くないだろう！ 自分から欲しがるようなメスには……ほら、俺のようなたくましいのでないとなあ!!」

そう言つて姿を現した腕の主は、一際巨体のオーク。その低く厳しい声には、はっきりと覚えがある。学内でも特に厳しい、生活指導担当の体育教師に違いない。

股間で雄々しく屹立する、たくましい肉棒。それだけなら散々見慣れたものだが、そのままコピーしたように、もう一本上に並んで生えていることが、魔法少女を驚愕させた。

「ほら、ボサツとするな雅！ こつちを向いて……ケツを突き出せッ!!」

「せ、先生待つて……ふあっ!？」

伸びてきた太い腕に腰を掴まれ、そのまま床へうつぶせに転がされる。白濁がたつぷり染み込んで重くなつた腰のリボンが、スカート越しに張りのあるヒップをピチャリと強く打ち叩いた衝撃に、思わず背筋を震わせてしまった。

「俺のチンポなら、前も後ろも一緒に塞いでやれるからなあ。自分から男を求めろのような淫らな生徒には、これくらいきついお仕置きが必要だ!」

「そ、そんな！ お尻まで……ま、待つて先生え……ひやあっ!」

二本の男根を見せびらかすようにビクビクと痙攣させながら、体育教師はその剛毛に覆われた手の平で魔法少女の腰をしっかりと掴み上げた。まるで獣のような四つんばい姿勢を強いられ、頬を染める羞恥の赤がますます濃くなる。

（が……我慢しないと。ボクのせいと、学園のみんなはこうなっちゃったんだから……ボクが……どんな目にあつても戻してあげないと……）

大丈夫、決して初めてのことでない。本来なら排泄をするだけの器官である菊穴も、

かがわからず、それがかえって不安感を煽る。

「どうした、突っ込まれただけでギブアップか？ まだまだこんなもんじゃないぞ！」

「ふああつ、ま、待ってえ……先生……こんな……二本もなんてえ……」

ただ挿入されただけで、呼吸も困難なほどの圧迫感が腹部を襲っている。動かれたら正気を保ったままでいられるかどうか確信も持たず、背筋を冷たい汗が流れた直後。

「せ、先生！ ずるいつすよ！」「そうだ、俺達だって華鈴とやりてえよ!!」

吹き飛ばされた触手男。それにゾンビ男……それだけではなく、華鈴の甘い雌声に誘われたのか、廊下からもヨロヨロと起き上がった有象無象の魔物達がメイドカフェとして飾りつけられた教室へ乱入し、魔法少女を突き犯す巨漢に殺到した。

順番争いで採めてくれれば、せめて呼吸を整えるくらいの猶予は得られるはず。魔法少女の淡い期待は、次の瞬間、あっさりと打ち碎かれた。

「うるさいぞ、お前ら！ 我慢できないなら、他の場所を使ってやればいいだろう！ 自分からチンポを求める淫乱娘だ。手も口も……全部チンポ塗れにしてやれ！」

「ふえあつ、そ、そんな!! 待って……ひつ、ひぐうつ、ンオオッ……」

「ほら、華鈴ちゃん、この可愛いお口で頼むぜ！ おおっ……熱くて気持ちよいッ！」

小刻みに痙攣を続けていた紅色の小さな唇へ、取り囲む魔物達の一人が自らの男根を押し込んできた。テニスボールを縦に並べたような数珠状の異形。球体の直径サイズに唇がこじ開けられ、口で完全に呼吸ができなくなってしまう。

「んごおつ……おじゆるうつ、んぷうつ、んにゆうつ……はひいつ、ああつ……」

耐えきれずに鼻で呼吸をすると、ツンと刺激的な臭いが脳天まで響いた。掃除をしていない古びたトイレに押し込まれたような、すえた臭い。欲望剥き出しで群れる魔物化した男達の体臭は、魔法少女の想像を遥かに上回る醜悪なものだった。

「口だけじゃ足りないし、手も使おうぜ、華鈴！　こんな可愛いカチューシャ着けて、メイドさんを気取るなら……ちゃ〜んとご主人様達にご奉仕しないとなあ」

言葉と共に右手首を掴まれ、次の瞬間、そこへ別の肉棒が握らされた。白濁の残滓で濡れ汚れ、手の平にべったり張りついている手袋。その薄布越しに感じる、隆々とした硬い感触。傍らに立つのは、瘤に全身を覆われた、イボガエルの如く醜悪な姿の魔物。身体同様、竿肌全体もブツブツに覆われていて、横目で一瞥するだけで生理的な嫌悪が胸に込み上げてくる異形。反射的に離そうとした手を上から握られ、奉仕を強制されてしまう。

「雅、自分で言ったことにはちゃんと責任を持たないといかんぞ！　さあ、しつかり全員のチンポを悦ばせてみるんだ！」

「頼むぜ、華鈴ちゃん！」「あのチビな華鈴が、こんなエロい娘だったなんてなあ」

男達は口々に嘲笑を浴びせかけながら、自らの欲望の赴くままに腰を動かしてくる。

出入りする球面状の竿肌に沿って開閉させられる唇。表面から、まるで白濁液のように粘度の高い汗が染み出してきていて、口の中に苦く塩っぱい味が広がる。舌に染み込む味わいが、自分が陵辱を受けているんだという事実を改めて思い知らせてくれる。



「へへっ、この服……メイドのとはちょっと違うけど、可愛いよなあ。魔法少女メイドつてのも、なかなかそるぜえ……くうっ、もつと強く握れっば！」

玉砂利を並べたような肉棒を握られた手を、乱暴に上下へ振り動かされる。硬い異物感が濡れた白い手袋越しにはっきりと感じられ、手の平が痛くなる程。一擦りしただけで、先からドロリと膿のように黄ばんだ粘液が溢れ出し、手袋を濡らし汚す。

既に闇の魔力が少し混ざり出ているのだろう。腕のあちらこちらに、まるで性器を穿られる時のような疼痛を感じる。昨日ようやく解放された、闇の魔力特有の感覚。

(染み出てきてる……闇の魔力。これ……全部搾り出せば、みんなを助けられる……)

混乱していた心が、そんなわずかな希望の光でようやく落ち着きを取り戻す。

「こら、雅！ ボーッとしていてはいかん！ ちゃんと気合を入れて……締めないか！」

パチーンッ！ パチッ、パチーンッ！！

鼓膜を揺らす乾いた打撃音。苺ショーツに包まれたヒップにジンと熱く痺れるような痛みが広がる。幼い頃、悪戯をして母親に叱られた時によく味わった痛み。

「くくっ、引き締まっついていい尻だ。授業中、ずっと思っただぞ……ブルマがよく似合う雅の尻をこんな風に叩きながら、気を失うまで犯してやりたいとな！」

二度、三度。ショーツの柔らかい布地を突き抜け、尻肌を針の如く突き刺さる剛毛に覆われた手の平が叩きつけられる。焼けつくような痛みが、極太二本の挿入で麻痺していた下半身の感覚を少しづつ呼び戻す。

肉穴が引き裂かれそうな激痛。入口、そして後ろ側から硬い感触に潰されそうな子宮。そこから溢れ出る熱い迸りが、ギッチリと充填された異物に押し戻される感触。

「ひゃあつ、はあつ……叩くのやあつ……先生、許しいつ……ひあああつ！」

パシッ！と肉を打つ音と痛みに合わせて、全身が強張る。限界以上に広げられた膣口とアナル、そして唇がきゅつと窄み、それらの場所を埋める異物感がより鮮明になる。

「おおつ、いいぞ、雅！ いい締めりだ……くっ……こりゃ、もう持たんな！」

力強い叫びと共に、二つの穴を埋める男根がまるでパイプのようにブルブルと震え始めた。それが射精の近づきを示す予兆とわかると、下半身から濁流の如く襲いかかる様々な感覚に押し流されていた意識が引き戻された。

「ま、待つて、先生！ 膣内……膣内は……赤ちゃんでできるから駄目だよおつ！」

闇の魔力がたつぷりと溶け込んだ白濁。それを搾り出すのはともかく、膣内で受け止めることだけはさすがに受け入れられない。なんとかして、外に出してもらわなければ。軽いパニックを引き起こしながら、必死に訴える。――が。

「駄目。すべて身体の中で受け止めることが必要不可欠」

今まで淡々と陵辱される華鈴の姿を見守っていたクレアが、ポツリと口を挟む。

「な、なんで！ そんな……」

「闇の魔力が満ち溢れた体液……あなたの膣内や腸で受け止めて、その魔力を身体の中に取り込まなければ……排出された魔力が辺りへ飛び散り、別の人間を侵食する」

抗議の声を上げた魔法少女へ、抑揚のない声が淡々と告げる。二度と経験したくなかった苦しい陵辱。それを受け入れてまでみんなを救おうとしているのだ。その苦勞が無になることは避けたい。だが、いくらなんでも膣穴で受け止めるなんて……。

「出るぞ……雅！ お望み通り……お前の膣内でぶちまけてやるからな！」
ビュブリュウリュウルウツ！ ジュブブブウブンツ！

「ま、待ってっ！ いつ……やあああああーっ！ 中に出すの駄目えっ、熱い……きゃふあああっ、できちやうっ、赤ちゃん……んぎっ、ひやふあうっ!!」

双頭の肉棒が一回り大きく膨らんだ直後、熱湯のような熱い感触が腹部へ流れ込んでくる。杭を打ちつけられたが如き勢いで子宮口をノックする感触。複雑に折りたたまれた腸内を濁流のような精液が満たし、お腹全体が白濁の腸詰になってしまったような気分。下腹が服の上からでもわかるくらい、ぽっこりと赤児の如く出っ張ってしまっている。

「んごおっ……はあ、……やあっ、お尻とおま○こ……精液たくさん……こんなあっ」

恐れていた膣内の感覚に、背筋の痙攣が止まらない。それでも子宮の中が焼けるように熱くなり、甘い悦楽が広がっているのが自分で悲しくなってしまう。

「ほら、休んでる暇はないぞ、雅！ 先生は体力には自信があるからな、一発や二発じゃ満足でき……なあっ……か、身体が……オオオオオオオッ!？」

背中から聞こえてきた大きな呻き声。二つの穴を埋めたままだった双頭棒が急速に萎んでいく。ヒップを掴んでいた手の平からも棘のような剛毛が消え、感じていた禍々しい気

配も薄れていく。ヌルンツと膣穴を埋めていた感触が引き抜かれ、尻穴をS字結腸まで貫いていた硬い異物感が、まるで霧のように消えてしまった。

「先生……はあっ……んっ……」

ドサツと床に倒れた人影。それは醜悪なオークではなく、人としての常識の範囲内で、ガッシリと鍛え上げられた肉体の中年男。体育教師本来の姿に間違いなかった。

（戻った……先生、元の姿に……）

ゴボツと音を立てて、杏仁豆腐のような白い塊が混ざった濃厚液が膣口から溢れ出るのに合わせ、子宮の奥に暗い疼きが広がっていくのを感じた。この一年、幾度も味わった闇の魔力の甘疼。どうやらクレアの言葉に偽りはなく、自らの胎内で魔物化した人々の迸りを受け止めることで、彼らを闇の魔力の呪縛から解き放つことができるようだ。

（この調子で……ボクが頑張れば、みんなが……）

妊娠の恐怖に押し流されそうな心を、ただその一心で支える。投げ出すわけにはいかない、自分のせいでこんな惨劇に巻き込んでしまった学園の仲間達の為に。そして守ると約束したのに守りきれなかった、渚の為に……。

「ほら、のんびりする暇はないぜ！」「次は俺！絶対俺だって！」

「ひゃっ、ま……待って、そんな……じゅ、順番——はあっ、あがあああっ！」

まるで砂糖に群れる蟻の如き勢いで。取り囲む男達が、魔法少女の身体を貪ろうと異常な臭気を放つ身体を摺り寄せてくる。

(が、頑張らないと……全員……ちゃんと、ボクが責任を取って……)

胸もヒップも腕も口も。身体中が、まるで洗濯機にでも放り込まれたように揉みくちゃにされる。あちらこちらから生臭い、様々な形の男根を押しつけられ、エメラルドグリーンのワンピースドレスが先走りの透明液で汚されていく。

「あぶっ……ま、待ってえっ！ みんな……こんな……ひゃっ、あああ……」

「か……りん……うっ……華鈴……はあ……なんて、こと……」

むせ返る男達の欲望臭に思わず悲鳴を上げた直後、人込みの向こうからか細い声が聞こえてきた。誰よりも自分を想ってくれている、優しい親友の声。

「ふえっ……な、渚ちゃん！ よかった……目が覚めた……」

必死に首を振り動かし、殺到する人込みの隙間からその姿を確認する。銅像の如く微動だにしないオークに両手を掴まれたままの灰色髪の美女。先ほどまで力なくうな垂れていたその顔が上がり、青ざめた表情をこちらに向けているのが見えた。

「酷い……華鈴、しっかりして！ くっ……クレア、あなたって人は……酷い……」

「……これはすべて彼女が望んだこと。……彼らの身体を蝕む闇の魔力を奪うのは、本来の持ち主である華鈴にしかできないから」

「っ……そんな……華鈴一人でみんなを……う、嘘……」

視界に入るだけでも、百はくだらない数が華鈴の周りに殺到している。廊下からは、入りきれない人々が順番を待ちわびて騒ぐ声も聞こえる。これだけの人数を一人で満足させ

るなど、身体が持つわけがない。

「また……華鈴一人に……なんて……」

「ひゃあつ、おごおつ……んう、はあつ、はいいつ……やあつ……腔内……妊娠……駄目……ああつ、きやふあああつ、はうううんっ!!」

あれほど愛しい親友を助けたいと願ったのに、結果はこの有様。快楽に流され、力を奪われて囚われの身。なす術もなく華鈴が犯し壊されていく姿を見せられるなど、死を与えられるよりも苦しい。口の中に鉄っぽい味が広がる。無意識の内に唇を強く噛み締め、血が滲んでしまっているようだ。

「華鈴っ！ このままじゃ……華鈴が……なんてこと……」

「……肯定。確かに彼女一人では……このまま全員から闇の魔力を奪い取るのは、肉体的に厳しいかもしれない。今も、本当ならとつくに意識を失ってはおかしくないくらいなのに……本当に、彼女は……優しすぎる」

取り乱す渚の横、相変わらず感情の見えない無表情を保ちながら、クレアがポツリと呟く。その紅い瞳は、今にも倒れそうなくらい息を切らしながらも、迫る男達の肉棒を必死に奉仕し続ける光の魔法少女を真っ直ぐに見つめていた。

「何か……何か……くっ、わ、私が代わりにやるわ！ だから、すぐに華鈴を……」

「……それは無理。彼らの持つ闇の魔力は、本来の持ち主である彼女か、私のように魔力の扱いに長けたものでなければ受け入れられない。未熟なあなたでは、暴走する魔力に振

り回されて……彼らのように、魔物化するだけ」

「そんな……でも……でも、このままじゃ華鈴が……」

「……わかってている。……私としても、計画が完成する前に、彼女に倒られるのは都合が悪い。だから……あなたに、少し手伝ってもらうことにする」

「手伝い……ンッ……ク、クレア……何を……あうっ、ふあっ！」

布地の中、張り詰めた豊乳が、突如横から伸びてきた少女の手で鷲掴みにされた。その小ぶりの手の平には半分も収まらない巨乳。粘土を捏ねるよう、丁寧な揉み解される。

「熱い。……親友が『酷いこと』をされているのを見て、感じていた証拠。いやらしいあなたに相応しい、手伝いの仕方を……教えてあげる」

淡々と咬きながら、クレアはロッドを掴んでいたもう片方の手を軽く掲げた。

黒い霧が禍々しいデザインの杖を包み……次の瞬間、紫色の毒々しい斑点が細長い肢体全体に散らばっている、おぞましい一匹の小蛇が生まれ出た。

「きゃあっ！ へ、蛇……？」

まるで血を塗りたくったような真紅の舌をチロチロと蠢かせる蛇。呼び出したクレアの黒い手袋に包まれた腕に絡みつきながら、青い布地にパツクされた乳脂肪へ迫る。

「近づけないで……そんなもの！ 早く、離しなさい……」

生徒会長らしい、厳しい態度を必死に保ちながら訴える渚。だが、その叱咤も不気味に蠢く爬虫類には通じない。チロチロと伸びる紅舌が、限界まで引き伸ばされたニップルの

根元を舐めた直後、無数の針を突き刺されたが如く激痛が乳房全体を駆け抜けた。

「はぎいつ、やあつ……はあつ、はぐうつ……キヤアアアアアアアッ！」

「我慢して。もうすぐ……完成する。もう少し……我慢して……」

「あぐうつ……はあつ、か、華鈴……華鈴……ひいつ、はあつ……あああああつ！」

繰り返して愛しい人の名前を呼びながら、灰色髪の魔法少女は、ただ豊胸を襲う不気味な感覚と激痛に身悶えることしかできなかった。

「おおつ、イッ……イクッ！ くううつ」「俺だ、次は俺だあつ！」

周囲を取り囲む男達の歓声が、どこか遠くから聞こえてくるようだ。

熱く痺れた膣穴から異物の感触が引き抜かれ、ゴボゴボと音を立てて注ぎ込まれた汚液が溢れ出す。子宮に響く闇の魔力の感触。元の姿に戻った人々が意識を失って倒れる音が聞こえてくるか否かというタイミングで、また次の男根が口を空けたままの膣穴へ埋め込まれる。すべての射精を膣穴と肛門で受け止めている為、これだけ大勢に犯されているにもかかわらず、腰から上のワンピースドレスはテラテラと輝く先走り汁を塗り込まれている程度で、さほど汚れてはいない。逆流する白濁で太股からエメラルドグリーン色のプーツまで真っ白に染め替えられた、見るも無残な下半身とのギャップが逆に痛ましく見える。(全員……学園のみんなを……た、助けないと……)

いつ終わるとも知れない輪姦連鎖。既に何人の白濁を受け止めたのかも数えきれない。

それなのに、取り囲む人の壁は一向に減った気配がないのが、今にも息切れしてしまいうな魔法少女の心を磨耗する。何本もの異形棒に貫かれた淫穴は、赤く充血して痛々しく腫れている。淫唇が大きく捲かれて、熟女のように。清らかな光の魔法少女のものとは思えない、淫らな性器と化していた。

「はあっ、んぐうっ、ちゅばあっ……はひうっ、んじゆるるるうっ、おぶうっ……」

もう顔を上げるのもきついくらい、息が切れてしまっている。それでも目前にツンとアンモニア臭を漂わせる肉棒が差し出されると、言われるまでもなくそれを口で啜え、カウパー腺液でヌルヌルに濡れ汚れた白い手袋で扱き始める。手や口で肉棒を高めておかなければ、より長い時間膣や肛門を擦られる。それを考えると休むわけにはいかない。

全身に鉛を載せられたような疲労が重なる中、熱い魔力が疼く子宮の感覚だけが、くつきりと浮かび上がり、魔法少女の意識を辛うじて保っていた。

(でも……こ、このままじゃ……最後まで持たないかも……身体があ……)

そんな弱音が脳裏を過ぎった時。突如、正面を塞いでいた人の群れが左右に散った。

「華鈴……か、華鈴……はうう……はあ……ああ……」

「ふえっ……んぐっ……はあはあ……な、渚……ちゃん……っ!? その格好……」

正面から歩み寄ってくる親友の姿に、華鈴は思わず口に押し込まれていた怒張を吐き出し、驚愕の悲鳴を上げてしまう。

「ンンッ……は、恥ずかしい……見ないで……はうっ……ああっ……くううっ……」

身体の前でそこを隠すようにしっかりと組まれた腕。その上からむっちりとはみ出している白い肉塊に、自然と目が吸い寄せられる。はち切れそうな巨乳が一回り大きく膨らんでいて、とうとう服に収まりきらずに飛び出していった。ずり下がった白いフリル付きの布地の上、苺をそのまま載せたように硬く膨らんだニップルが震えている。

「渚ちゃん、ど、どうして……その身体……あの……」

さっき見た時は、こんな胸になってはいなかった。まさか、大切な親友まで、闇の魔力の影響を受けてしまったのだろうか。不安が胸をざわめかせる。

「ほら……早く歩いて。あなたの大切な人を助けたいなら……」

羞恥に身体を小さく縮ませる灰色髪の美女を、クレアが背中から抱き締め、華鈴の方へと押しやっっていく。宵闇色の手袋に包まれた小さな手の平が、零れ落ちた乳房を根元の方から搾り出すように愛撫し続けていた。

「ひぐうううっ！ う、動かさないでえっ……やあつ、お、おかしい……胸が……熱くて……何か……何か出てきそう……はあつ、あぐううっ!!」

胸の中央に湧き上がる強烈な快感と熱液の感触。普段は他者を威圧する凜々しい光が浮かんでいる瞳が涙で歪み、唇から悲鳴が零れ落ちる。

その直後、ツンと尖った紅いニップルの先端から白いものが迸った。

「い、いやあああああつ！ どうして……ミルク……なんで……きやううっ！」

悲鳴に合わせ、乳首の先に無数開く乳腺のすべてから霧状の母乳が盛大に噴き出した。

四つんばいのまま呆然と見上げていた華鈴の顔が、瞬く間に真っ白に染め変えられる。

「あぶうっ……んうっ……ふあっ、何……この臭い……精液みたい……嘘……」

顔全体を包む生暖かい乳液。そこから漂うのは、渚の美しさからは想像もつかない生臭さ。膣穴へ注がれ続けている白濁液を煮詰めて濃縮したようなものだった。一瞬間を擧めそうになるが、それを放った親友の気持ちを考えて必死に平静を装う。

「嘘っ!? どうして、どうして私の胸からこんな……いやああああああああっ！」

華鈴の反応を見るまでもなく、霧状の白濁母乳を噴き出し続ける渚は発狂したような悲鳴を上げていた。漂う臭気は、それを放つ灰色髪の魔法少女の鼻腔にもしっかりと届いていた。男の精液臭漂う母乳を放っているなど、考えるだけで身も毛もよだつ悪夢。牛の乳搾りの如くクレアの指で扱かれるニップルが、醜い男の肉棒のように見えてしまう。

「渚さんがあんなに臭いミルクを……」「すげえ……俺の射精より勢いいいぜ」

華鈴を犯すことに夢中だった魔物化した男達も、美女が放つ異臭漂う精液母乳噴射に見蕩れ、それを囁し立てるように歓声を上げていた。

「止まって！ 嘘……こんな……止まってっばっ！ いやっ……見ないでっ……」

身体の前でしっかりと腕を組み、白濁を放つ胸をなんとか隠そうと懸命になる。だが、驚く程に肥大した乳脂肪を覆うことなどとても不可能。腕の上から飛び出した乳首は母乳噴射に合わせて苺の如く膨れ上がり、霧状母乳を最愛の親友へ浴びせ続けていた。

「ふああっ……渚ちゃんのミルクかかって……んうっ、はあ……ああ……」

精液臭漂う白濁が、頭の天辺から胸元までを余すところなく汚す。ツインテールを纏めるリボンが真っ白に染まり、髪がトリートメントを塗りたくったようにべったり濡れる。

渚との睦み事の時、闇の魔力によって生えたフタナリから放たれる白濁を浴びせられているよう。激しい快楽のひと時が思い出され、子宮の疼きが自然と強まった。

「はあっ、んちゅうっ……ちゅうっ、はあ……んぐうっ……ンン……」

口元に垂れてきた雫を、無意識の内に飛び出た舌がチロリと舐める。その瞬間、まるできついアルコールを飲んだが如く、口内から食道までがカッと熱く焼けていった。

「はあ……なんで……身体、元気にい……ンッ……んぐっ、はあ……ンえ……」

舌を大きく伸ばし、白濁のリップクリームを塗りたくったように照っていた唇全体を舐め回す。生臭く、バターのように濃厚な味わいが口内に広がる度に熱感が高まり、澱のように溜まっていた疲労が嘘のように吹き飛んでいく。腫れ上がった淫唇の炎症も治まり、ヒリつく苦痛も嘘のように消えてしまった。肉壁を擦られ、子宮口まで突かれる挿入快感だけがくつきりと浮かび上がって残り、表情が思わずうっとり蕩けてしまう。

「いや……な、舐めちゃ駄目よ、華鈴！ 汚い……汚いわ……」

「でも、渚ちゃんの舐めると……身体が元気になるんだもん。ちゅっ……はあ……」

イヤイヤと駄々を捏ねる子供のようになさく首を横に振る渚。そんな、ちよつと可愛らしい親友を見上げながら、華鈴は進む白濁霧を受け止めるように口を大きく開いた。

「ううっ……何よ、これ！ 一体……どうなって……いやあ、ミルク止まらない……」

「邪淫蛇の毒の効果。女の乳腺を刺激して、特殊な母乳を溢れさせる」

「特殊なあ……ンンッ……こ、こんな臭くて変な……はあっ、ああっ……」

「飲んだ者の体力を急激に回復し、傷を癒す。元々、魔物達の慰め者として捕らえた女達を長く持たせる為に作られたモノ。味と臭いはともかくとして、効果は絶大。だから……もつと搾り出して、彼女に飲ませてあげるといい」

羞恥に震える渚へ淡々と説明をしながら、クレアの細い指が肥大した乳首粒の根元を捻り潰すような強さで摘んだ。

「あぎいいいっ、乳首、そんなに強くはあっ……無理、もう無理よおっ——ンンッ！」

根元から押し出された母乳が、すべての乳腺から勢いよく噴き出す。ニップル全体に広がる甘美な痺れは、フタナリ肉棒で味わう射精の快感に似ていた。一本の肉棒から伝わる射精快感だけでも、意識が蕩けてしまいそうなくらい激しいもの。それが乳腺の一つ一つに込み上げてくるのだ。正気を保てるわけがない。

白濁で薄汚れた透明のスカートの中、すらりと細い足が大きく痙攣し、とうとう膝から崩れ落ちてしまう。華鈴の目前に零れ落ちた魔乳が突き出される体勢になり、霧状の母乳噴射がピチャピチャ音を立てて少女の顔を染め上げていく。

「母乳……渚ちゃんの母乳……んっ……はあっ、ああ……飲む……もつと……」

この精液臭い母乳を飲めば、身体が楽になる。白濁し始めた意識の中、そんな事実だけが浮かび上がり、嫌がる親友の反応に構わず華鈴の唇が右のニップルへ近づく。

まるで赤児のように、コンデンスミルクをかけられた母乳首をすっぱりと啜え、チュウと下品な音を立ててしまふ程の強さで吸いつく。丸めた舌で乳首の下半分をしつかりと包み、上半分には上顎を張りつけて噴き出す母乳を直接受け止める。

蛇口を全開にした水道のような勢いで口いっぱい流れ込むミルク。飲み込む速度が追いつかず、餌をいっぱい溜め込んだハムスターのように頬がぷっくり膨れ上がっていく。

「ングング……はあ……んじゆるるうっ、はむうっ……んちゅばあっ……」

口から鼻にまでツンと抜ける、濃厚な雄臭。息苦しくもなってくるが、熱い濁流が食道から胃へ流れ落ちるのに合わせて身体の火照りも強くなり、四肢へ力が戻っていく。

「きやうっ、か、華鈴！ 吸わないで、そんな……す、吸われると……はあんっ！」

「はははっ！ すげえ……渚さんが、なんかホルスタインになっちまったみたいだ」

取り囲む人垣の中、そんな嘲笑が誇り高き生徒会長の心を揺らした。跪き、なすがままミルクを吸われているその姿は、確かにミルクの為だけに生かされている乳牛のよう。

生徒会長しての尊厳も誇りもない、惨めな姿だ。

「ち、違うの……こんな……華鈴……やめて！ 早く……早くミルク止まって！」

「……ワガママを言わないで。あなたがどうしても華鈴の手助けをしたいというから……わざわざ、こうしてあげたのに。自分の言葉には最後まで責任を持って欲しい」

声を擦れさせながら訴える渚の後ろで、ようやく胸から手を離して立ち上がった漆黒の魔法少女が淡々と言い放つ。こんな手助けを望んでいたわけではないと言いつ返したいのだ

が、愛する親友が乳首を吸う刺激がきつく、言葉を紡ぐ余裕もなかった。

「止めたいなら……手伝ってやるぜ、渚さん！ ほら……これで栓してやる!!」

ズブウウツ……ヌプリユウツ……ヌプリユウツ！

取り囲む魔物達の中、オーク化した男子の一人が、いきり立つ怒張を空いた左の乳首へと押しつけてきた。膨れたニップルを肥大した魔乳脂肪の中へ押し込むように深く突き刺さり、竿の半分程度がそのまますっぽり埋まってしまう。

「あぎいっ、はあぐうっ……そ、そんな場所にオチンチン……ヒイッ……はうううっ！」

抗議の言葉を口にする間もなく、乳房へ埋まった怒張が素早いリズムでピストンを始める。膣穴を犯すのと同じ荒々しい動き。出入りする肉棒の動きに合わせ、弛む柔肉に埋められたニップルがゴリゴリと刺激され、痺れる刺激が身体の芯を駆け抜けた。

「んぷっ……はあ、駄目え……せ、精液……精液は全部ボクの身体に出さないと……」

それを見ていた華鈴が、慌てて乳首から唇を離して訴える。頬に溜まっていた母乳がダラダラと滝のように溢れ出し、首元から胸まで流れる。鎖骨の窪みや胸の谷間にまで白濁母乳が溜まり、エメラルドグリーンのワンピースドレスにも染み込んでいく。

既に精液塗れにされている下半身同様、上半身も無数の男達に精を注がれたような白濁染め姿になってしまい、淫靡な雰囲気が一層増していた。

「なんだよ、華鈴。こんなに大勢いるのに、一本も渡したくないってか？」

「へへっ、随分淫乱なんだな。だから、そんないやらしい身体に変身しちゃったのか？」



取り囲む人垣から一斉に囁し立てる笑い声が上がり、魔法少女の胸の奥で燻り続ける羞恥の炎を強く煽った。既に両手両足の指では足りない人数の肉棒を二穴で受け止めているのに、まだ狂おしげに求めている。それは否定しようのない淫女の姿。

「ち、違うもん！ 欲しいんじゃない……その……な、渚ちゃんに酷いことして欲しくないから！ だから——ヒィッ……あぎいつ、ああああああつ！」

言い返そうとした声が、下腹部をズンッと重く貫く衝撃で上擦る。臭母乳の効果で炎症が収まったばかりの腔口が、硬い異物に押し広げられる。表面が刺々しい剛毛に覆われているのだろう。粘膜壁のあちらこちらに、焼けた針で突かれたような熱い疼痛が走る。

大きく見開かれた瞳に浮かぶ涙粒。少しでも痛みを紛らわせようと、半ば本能的に目前のチェリーニップルへ吸いつき、霧状噴射を続ける親友のミルクを貪り飲む。

「か、華鈴!? 駄目……だから、吸っちゃ駄目よお——はあつ、あがあつ……いいっ！」
右の乳首粒に走る、水飴のように蕩ける甘美感。駄目だと心の中で訴えても、自分のすべてを犠牲にしても守りたいと願った最愛の親友の愛撫を振り払えない。

口付けを求めるが如く窄んだ紅唇が根元をしっかりと締め、先ほど噛みついてきた毒蛇と同じように、小さな紅舌がミルク塗れになった先端部分を舐め回す。射乳を続ける乳腺の一つ一つが丹念に舐め上げられ、熱く痺れていく。

「すげえっ、乳首どんどん硬くなって……デカパイ全体が火照って……こりゃ、マ○コにぶち込むより気持ちいいかもしれねえ……おとおつ！」

噴き出る乳液が乳脂肪の奥へ押し戻されそうなくらい、深々とめり込んだ浅黒棒。母乳とは違うネッチョリと冷え固まったラードのような感触がニップルを包み、背筋に寒気が走る。不快なはずなのに、赤児のように吸いつく想い人が与えてくれる快感が左胸にまで伝わってきて、否応なしに感度が高められてしまい、火照りが鎮まらない。

「華鈴……もうっ、乳首らめええっ……こ、このままじゃ……ひうっ、はあんうっ！」

「でもおっ……渚ちゃんのオッパイ飲んでると楽になるからあ……ご、ごめんさあ……い……ンゲウッ……ちゆうっ、はあっ、はむうっ……」

勢いを増す臭母乳を飲み続ける華鈴の顔も、渚の乳肌と同じ濃い朱色に染まっていた。異様なまでの感度の高まり。魔物達の慰め者として捕らわれていた女達を長持ちさせる為の毒母乳。体力を回復するだけでなく、強烈な催淫効果もあるに違いない。

羞恥に身悶える親友に繰り返し謝罪しながら、口いっばいに広がる濃厚なミルクを求めずにはいられなくなっていた。

「くっ……チンポが千切れそうなくらい締めといて、よく欲しいわけじゃないなんて言え
たもんだよなあ、華鈴！ た、たまんねえ……出るっ……おとおっ！」

ドビュルルルウッ！ ブチュリユウウウッ！

激しい声と共に、白濁で満ち溢れた子宮目がけ次の射精が襲いかかる。水風船の如く膨れ上がった肉袋が限界以上に拡張し、下腹がぼっこりと更に大きく飛び出してしまう。

「す、すごおっ……出てるう！ たくさん、お腹破けるくらい出てりゅう！」

高らかにギスカールが叫ぶと共に、アナルを埋める剛直が急激に太さを増していく。まるで丸太の如く膨らんだ肉棒。腸がパンパンに充填され、二本の肉棒が埋める膣穴が否応なしに押し潰されてしまう。狭く潰れた膣壺の中、痙攣を続ける肉棒同士がピッタリと密着し、振動が肉壁を通じて華鈴の全身を揺らした。

「ひやぐうっ、はあっ——イッ……はあっ、あはあっ、もう……何、これ……ああっ、服……服擦れるっ……ンンンッ！ あはあっ、きやぐうっ！」

白濁や汗で肌に張りつくワンピースドレスが、ビチャビチャと音を立てて震える肌と擦れあう。ずれたショーツが小陰唇の端を擦り、揺れるスカート裾の裾が蜜液に塗れた太股をくすぐるように撫でた。混合液に濡れ汚れたエメラルドグリーンのブーツ。その足先が、身体中を血脈に乗って流れる甘美感に耐えきれず、ピンッと真っ直ぐ伸びてしまった。

「華鈴っ、華鈴のおマ○コっ……っ、潰れてイイッ……凄く狭くて気持ちいい……オチンチンどう……私の……私のオチンチン、気持ちいいっ？」

乱れる華鈴の胸へ顔を埋めたまま、灰色髪の女神が盛りのついた犬の如き荒々しさで腰を振る。普段の気品溢れる姿からは想像もつかない、欲情に支配された痴態。何度も何度も繰り返す尋ねながら突き入れる痙攣肉棒が、小さな子宮口を少しづつこじ開ける。

「あぐうっ、な、渚ちゃんのおチンチン……子宮に入る……はいりゅうっ！ そ、そんなに……そんなに入れられると、ボクおかしっ……きゅううっ、んぐうっ！」

憎き敵を産み落としたせい、子宮口も緩んでしまっているらしい。二度、三度、杭の

如く突き立てられる渚の雌肉竿の先が、ズブリと肉室の中まで突き刺さる。

「違う……私……私のペニスの方が……華鈴を満足させられる……ほら、華鈴のオマ○コ……こんなに喜んでくれている……はあっ……んんっ、はあっ……」

小声で呟きながら、紅い瞳の魔法少女はあえて腰を引き、膣口の入口辺りを重点的に擦り始めた。肉傘が二本の怒張で拡張された膣口を大きくこじ開け、小陰唇が使い込まれた熟女の如く卑猥に捲れる。勢い余って半分程飛び出した亀頭肌が、割れ目の頂点で指にこね回されるクリトリスにまでぶつかってしまう。

蜜と先走り汁に塗れた亀頭の摩擦は、指で摘まれるのとはまた別の快感を雌粒に生み出す。表面の薄皮を削られて快感神経を剥き出しにされていくような、恐怖すら伴う壮絶な甘美。大きく目を見開き、背中を憎い深淵王の胸板に預け、弓形に仰け反ってしまう。

「はあっ……も、もうっ……クリも子宮もおっ……イッ……きゆうっ、ひゃあっ！」

全身を襲う悦楽が、光の魔法少女の心を打ち壊していく。間近で聞こえる親友達の甘声に、辺りに響く学園の女子生徒達の艶やかな声。彼女達のように、自分も素直に快楽を受け入れて悶えれば、どれだけ心地よいだろう。そんな誘惑だけが脳裏に広がっていく。

(もう……駄目……オチンチン……渚ちゃんとクレアちゃんのオチンチン凄くて……もつと……もつと欲しくて……頭がおかしくっ……やあっ……あああっ……)

「華鈴、どっち……どっちがいいのおっ……はあっ、んんっ！」

「教えて……欲しい……私と渚……どっちが……くふあっ、はあぐっ」

オーク達の乱暴な突き上げに押されるようにして、甘ったるく喘ぎながら腰を振り動かす魔法少女二人。競いあうように尋ねてくるその言葉に答える余裕もない。

「も、もうっ……わからあっ……なあっ、はあっ、んぐうっ！ おひりいっ……オマ○コ……ぜ、全部イイッ……感じてえっ……イキュウッ……オチンチン……オチンチン全部好きいっ……だあいしゅきいっ……んぐうっ、じゆるるるうっ、むちゅりゅっ！」

三本の肉棒で圧迫される子宮が、耐え難い絶頂感に打ち震える。羞恥も何も考えられない、ただ突かれる快感に口の中の怒張をおしゃぶりの如く吸い続けながら喘ぐのみ。

「やあっ……もう、どっちかあ……どっちか選んでえっ……華鈴の意地悪うっ……」

「華鈴……やっぱり優しい……そこが……とても好き……はあっ、んんっ……」

「らあふえっ……も、もうっ……イイッ……二人とも……オチンチンすぐおーっ！ もつと、もーつと奥まで二人のオチンチン欲しいっ！ いっぱい……いっぱい犯してえっ!!」
やや不満そうに甘ったるく呟く渚と、改めて嬉しそうに微笑むクレア。そんな二人を見つめながら、ただ身体を支配する甘美を素直に叫ぶことしかできない。

「いいぞ、淫らな魔法少女共！ いけっ……さあ、盛大にその欲望をぶちまけてみる！」

「ウオオオオオオッ!!」 「だ、出すぜエ!! ケケケケッ！」

深淵王の叫び声と共に、渚とクレアを突き犯すオーク達の叫びが響く。

力強く押し出された腰。パンッ！ と乾いた音を立てて、毛むくじやらの腰が、二人の揺れるスカート越しにヒップをスパンキングした瞬間。

ドビュリユウウツ!! ビュブブブウツ! ビュリユルルウ!!

「きゃうう……出て……りゆうつ、はあつ、んぐつ……せ、せーし……精液まらあつ……中に出てえつ……きゆりゆうつ、いきゆうつ、もつ……んひやぐうつ、はああつ!」

「イッ……ンッ! はあつ、嘘……こ、こんなあつ……押し出される……駄目……も、持たなく……持たなくつ……はあつ、ああつ……イクッ……またあつ……また、で……出てしまうつ……嘘……いやあつ……あああつ、くうつ……イクッ……ンア——つ!」

低い白濁放射の音と共に、フタナリ魔法少女二人の声が夜空に響き渡る。

子宮をパンクさせんばかりに満たす魔物精液。灰色髪と紅い瞳の魔法少女達は、膨れ上がる子宮の圧迫感に身震いしながら、愛する少女を突き犯す肉棒を痙攣させた。

「ヒッ——オチンチン……い、いっばい震えてえつ……ひやあつ、あああああつ!!」

ぶつかりながら痙攣する雌肉竿の刺激に、華鈴が熱く身悶えた直後。

ドブリユウウツ……ビュルルルウツ、ビュブブボオツ! ビュリユルウツ!
入口の方からクレアの白濁が、子宮にねじ込まれた亀頭からは渚の白濁が。

同時に放たれた白濁液が混ざりあい、ツインテールの魔法少女の雌器官を水風船の如く膨らませていく。甘美に満ち溢れた子宮を満たす熱感。まるで身体中が吹き飛びそうな凶暴なまでの絶頂感が、一気に身体を駆け上ってきた。

「とどめだ……この俺と魔物達の進りで……達してしまえつ!!」

ドゥブリユブブッ! ヌブリユウウツ! ビュブブブブウツ、ビュブーウツ!

直腸で始まった激しい振動。深淵王の巨根が一步遅れて精を放ち、S字結腸から大腸の方にまで固体に近い粘度の白濁液が流し込まれる。膨れ上がった子宮と腸。内臓同士が互いに押しあい、ドレスの腹部が妊婦の如く膨らんでしまう。

ビュリユルルッ！ ビチュアッ！！ ヌチュウッ！ ブブブプリユウ！！

同時に周囲を取り囲む魔物達も、ゼリーのようにこつてりとした雄液を放ち始める。

エメラルドグリーンのドレス、空色のドレス、宵闇色のドレス。降り注ぐ白濁が、少女達の身を包むそれぞれの魔法少女のコスチュームを等しく澱んだ白色へと染め替えた。

「きゆううー!? あひやあつ、お腹あつ……ふ、服もヌルヌルたあくさんっ！ も、もうっ、全部精液……あちゅいのいっばいでえっ、いきゆうっ、イひやあつ……イッチャうのおおおおおおーっ!! きゆうっ、臭いので——イクンンッ！ はあぎゆううっ！」

未だ膣内を埋める親友達の肉棒を潰してしまう程、膣穴が激しく締まって痙攣する。全身が甘美感一色に塗り潰され、他のことが何も考えられない。身体中が性感帯になったよう、濡れたドレスがわずかに肌を擦るだけで絶頂感が再び脳天まで突き抜けてくる。

「か、華鈴………凄………凄くエッチ………あはあ………やっぱり一番可愛いわあ………」

「華鈴………はあ………よかった………イッて………くれてえ………はあ………ンンッ………」

愛しい華鈴の大絶頂を見届けた直後、膣穴を並び犯していた渚とクレアが、力尽きたようにその場に倒れ込んでしまった。

「あはあっ………す、すごおっ………みんなあ………みんなのオチンチンでえ………えへえ………気



持ちよくなつふえ……はあ……ンンッ……」

そんな親友達の姿を見つめながら、華鈴もまた力尽きたようにがっくりとうな垂れてしまふ。それでも口いっばいに溜まったゼリーのような菌ごたえの白濁を咀嚼し、飲み込むことだけはやめない。胃へ流れていく白濁が、腸を満たす白濁と混ざりあい、身体全体が白濁詰りになってしまったような感覚に、うっとり意識が遠のいていった。

「残念だったな。これでは誰のチンポでイットのかもわからん。賭けは不成立だ！」

初めからそういうつもりだったのだらう。愉快そうに笑いながら、巨体の深淵王は抱え上げていたツインテールの魔法少女を、無造作に投げ捨てた。

「さて、楽しませてもらったが……そろそろお別れの時だ」

悦楽の波に漂う意識の中、そんな深淵王の冷たい声が聞こえてくる。

「かつては、貴様を従えようと欲深く考えて、手痛い失敗をした。二度と、その過ちは繰り返さない。……貴様の胎内から生まれ出でる時に、エンジェルススキンの魔力もたっぷり吸収させてもらったことだしな……もう、貴様に用はない!!」

自らの力を鼓舞するように、太い右手を掲げるギスカル。その手に、恐ろしい程に強力な闇の魔力が集まっていく。夜空に浮かぶ月の如く、真円を描く闇の球体。

(ふぁ……凄いや魔力……あんなの受けたら……み、みんな死んじゃう……)

薄れる意識の中、肌をピリピリと刺激する魔力の波動を感じ、そんな危機感を募らせるツインテールの魔法少女。だが、抵抗しようにも身体に力が入らない。白濁をたっぷり

吸い込んだ布地がクチュと音を立てて肌を擦れるだけだった。

「さらばだ、カリン！ 渚！ そして……仇であるこの俺にまんまと操られていた、愚かな姫君よ！ 魂すら残さず、この世から消し去ってくれるっ!!」

大地を震わせるような怒声。闇の球体が一回り膨れ上がり、雷撃の如く火花が散る。

「に……にげ……みんな……なっ……ああっ……」

精液に塗れた唇がわずかに動き、必死に訴える。だが、傍らでぐったりと倒れる渚もクレアも動くことはなく、魔物達に嬲られていた人々が逃げ出す足音も聞こえてこない。

（こんな……駄目……みんなを……せめて、みんなだけでもおっ……お願い、エンジェルスキン……ボクはどうなってもいい……だから……だから……）

最後の奇跡を信じ、身体を包む汚れきった宝具へ訴える。しかし、最早、魔力は欠片も残っていないのだろう。悲痛な訴えにも、白濁色に染められたドレスは反応しない。

——だが。

（ふあっ……お、お腹……少し、熱い……なんで……こ、これって……まさかっ……）

「消えろ、忌まわしき魔法少女共っ!! この深淵王ギスカールの復活を祝う、醜い肉火花と化すがいいっ！ フハハハハハーッ！」

高笑いと共に、ギスカールがその太い手を振り下ろす。作られた闇の球体が、衝撃波を伴い、横たわる魔法少女三人へ向かって真っ直ぐ進んでいった。

——ドゴオオオオオオッ！ ブルオオオオオオオッ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>